

# エスペラント

〈ルドヴィコ・ザメンホフ生誕 165 年記念 1859~1917〉

向井豊昭の

関連小説

「Saitō Hidekatsu」を再評価する意義

岡和田 晃

「ロシア語で話せ。ここはロシアの領土だ」と、警官が女に怒鳴りつける。「ポーランド人がポーランド語で言うのが、何が悪いのですか」と反論する男を、警官たちが連行していく。それを見ていた者のなかに、少年時代のザメンホフがいた。ポーランドのピアリストックでユダヤ人として生まれた彼は、かように屈辱的な経験を一つの契機とし、国際補助語たる人工言語・エスペラントを生み出した……。

この場面は、作家・向井豊昭(1933~2008)の小説「Saitō-Hidekatsu」(小説集『ここにも』1976 所収)で紹介される、小学校高学年の国語の教科書に載っていたというザメンホフ伝の中の逸話である。

向井は1960年代から、小学校教員という立場からアイヌの教育をめぐる権利獲得運動に深く関わり、その葛藤を小説化して発表してきた。やがて「アイヌにとっては侵略者の言葉である日本語」「アイヌの子どもたちにもものを教える」ことに忸怩たる思いを抱くようになる。「あいつは階級意識がなかった」「あいつは教室ベッタリでアイヌ人民との結合はなかった」と後ろ指を指されながら、“同化教育の総仕上げ”とは別種の道筋を模索するようになる。

向井はエスペラントに活路を見出した。“日雇い労働者の学者”こと三ツ石清、アナキスト詩人の向井孝、後に『日本エスペラント運動人名辞典』を監修することになる峰芳隆、北海道エスペラント連盟の星田淳といった面々と、彼は交流を育んでいく。



「Saitō-Hidekatsu」は、発表媒体が私家版の小説集『ここにも』=上図であったため——詩人の更科源蔵や小説家の高橋実らに謹呈されたものの——読者は限定的だった。にもかかわらず、山形県でエスペラント運動やカナモジ運動、ローマ字運動を推進した先駆者・斎藤秀一(1908~40)を描いた代表的な小説として、今でも記憶されている。

## 「Saitō-Hidekatsu」の主人公と語り手

小説内で語り手は、「治安維持法によってしょっぱかれ、病気にかかって」死んだ斎藤秀一の足跡を、鶴岡市図書館所蔵の秀一日記を精読することで追い直す。「20ページ ヲ ヒラキナサイ!」/ヒトゴロシ/チュウギ ト オシエル/ココロ ワ クライ」と書きつける秀一の筆致に、人間味を見出すのだ。「神様じゃないんだよ。山の中の学校からぬけだすことを考えたりしてさ。身につまされちゃってる

んだ」という述懐に代表される心情の揺れ動きこそが、この小説をユニークにしている。

秀一は庄内方言を矯正し、やがては日本語のローカリティそのものの消滅をも夢見ていた。他方の語り手は、そこまで理想を追求できない。東京生まれで疎開先の下北で育ち、下北では標準語、東京では訛りがあるとみなされる経験を有していたからである。地域と普遍の狭間で揺れ動く思いを克明に書きつけているがゆえ、刊行から半世紀近く経ってもなお、本作は読むに値するものとなっている。

## アイヌ口承文芸のエスペラント訳

エスペラントにも限界はあったが、向井はアイヌ口承文芸をエスペラントに訳すなどして、それに向き合った。ハンガリーのナチ党員による裏切りを描く文芸評論家ベンチク・ヴィルモシュの小説「シャーマンの死」の訳は、復刻し現在でも入手できる(『向井豊昭傑作集 飛ぶくしゃみ』2014 所収)。

エスペラントを「思想的に捉える動きは“オールド左翼”とみなされて久しい。2020年に“Esperanto”の名を全編英語の雑誌に冠する、かなり露骨な文化盗用が起きたが、多数の“リベラル文化人”が同誌に参加し、大新聞も追随した。当然起きたエスペラント主義者たちからの批判を、なぜか党派的に圧殺せんとする動きさえあった。

そこで私は、こうした反動を時評で批判するとともに、文芸評論家の東條慎生の協力で2013年に再刊した「Saitō-Hidekatsu」を、オンラインで読めるよう無料公開した。\*

昨年、私は受け持っている大学の講義で向井とエスペラントについて紹介したところ、受講生たちは誰一人、エスペラントの存在すら知らなかった。私が中学校のときには、英語の教科書でザメンホフについて習ったものだが、今や言語帝国主義への内在的批判という問題意識そのものが、忘却されようとしているのかもしれない。私たちは、もっと思い悩む必要があるのではないか。(おかわだ・あきら、

文芸評論家・作家、東海大学非常勤講師)